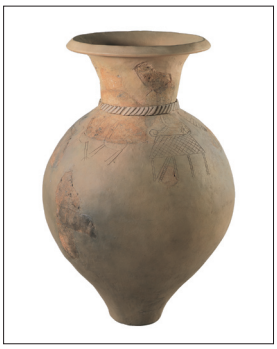
# 女性シャーマンを描いた大壷

●コレクション・データ

時　　代　弥生時代中期
調　　査　唐古・鍵遺跡第 8 次調査ほか
発 見 年　1985 年
大 き さ　復元高 80.6 cm、復元胴部径 54 cm
展示位置　第 1 室 「まつりといのり」



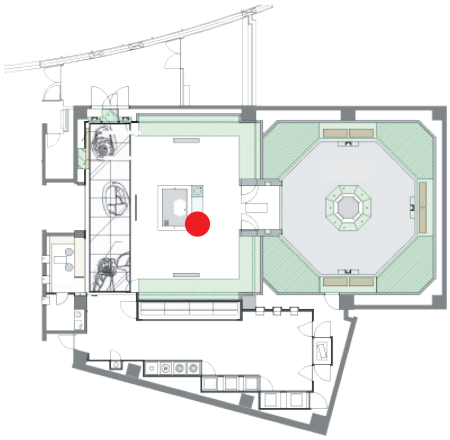
弥生時代の精神生活を考えるうえで、注目される遺物として土器に描かれた絵画があります。「絵画土器」と呼ばれているもので、その多くは、土器を野焼きする前にヘラで絵画を刻んだものです。したがって、絵画といっても正しくは「線刻画（せんこくが）」とするものが多いのです。

さて、今回紹介する絵画土器は、復元すると高さ80（セン）チほどの大壷になり、絵画土器のなかでは最も大きなものになります。その壺の胴部上半に、並列的に建物・人物・鹿がめぐらされています。絵画土器は破片で出土することが多く、絵画が土器全体にどのような構成で描かれていたかを知る資料はほとんどありません。このことから、今回の資料は絵画の構成がわかる重要な資料となるのです。

絵画は建物を中心としてその左右に人物と鹿を配しているようで、建物と人物が重要な要素であることがわかります。建物は寄棟造（よせむねづく）りの高床建物で、大棟には大きな渦巻き状の棟飾りがつけられ、床下には手摺りのある梯子（はしご）がかけられています。建物の右側の人物は、下半身のみしか分かりませんが、袖の一部と女性のシンボルが表現されており、清水風遺跡の絵画土器から、両手を挙げるポーズであったことが推測されます。一方、建物の左側の人物は、両手両足を広げたポーズで左手は鹿の頸（くび）を捕まえているように見えます。これら建物と人物の間を埋めるように牡鹿や雌鹿が配されています。

おそらく大型建物の前で女性シャーマンが「魂振（たまふ）り」、すなわち生命の再生を祈っている姿を表現しているのでしょう。そして、そのまつりの場には、犠牲獣として鹿が供えられていたのではないでしょうか。

今回の絵画土器は、シャーマンの性別を特定できる唯一の資料であるとともに、全体の構図からまつりの場を想定できる重要な資料といえましょう。



ミュージアム上面図と展示位置